

「民話の意識」

―わが短大生のレポートを基に―

矢 口 裕 康

昭和五十二年度のが短大の児童文化の講義に、民話を教材として導入してみた。「民話と子供」と題した講義である。

この民話を教材として導入した意図は、現代のマスコミ・児童文学等の中に占める「民話」の存在の大きさからである。テレビにおいても、数種類の民話ものが放映され、ある程度の支持をえている。このことも「民話ブーム」なるものに拍車をかけた一因といえよう。また、児童文学における民話ものの存在は、ここに語るまでもないことであろう。

このような民話ものの氾濫の中で、特に保育科の学生は、この状況に対して一つの認識をもつべきであろうということが、講義の主眼である。保育科の学生が、卒業後、保育園・幼稚園等の教師として、教育の現場にたつた時、これらの教材をどう取り扱うべきかという問題が、当然でてくることと思う。

講義は、民話の概念把握とその教材論ということで行なった。この講義の過程で、二回のレポートを試みた。その結果を基に、短大生における民話意識というものをみたいというのがこの小文の主題である。

第一回は、保育科A（五十六名）B（五十六名）クラス四月二十二日、保育科C（五十七名）D（五十六名）クラス五月六日と、日時は違うが、講義の第一時限目に、次の三点について机上レポートを試み

た。その三点とは、

- ①記憶に残っている昔話の名称をあげよ。
- ②①より一話を取りあげ、その筋書きを書け。
- ③②の話の対象（聞き手つまり、幼稚園児・小学生等、具体的対象をさす）を設定した場合、どこに重点をおいて話すか。

というものである。

この机上レポートの前には、民話についての概念を、吉沢和夫氏著『民話の再発見』¹、民話の世界と方法・民話とは²を基に、解説をした上でのレポートである。

まず民話を①民間説話の略称（Folk tale）②昔話・伝説・世間話などを総括する呼び名③民衆の中に生きる文芸という三点をもつて位置づけ、この場では、木下順二氏の「夕鶴」に代表されるような民話劇や、児童文学における再話は含まないものとした。そして、吉沢氏の次の三点をも付け加えて、民話の位置づけとした。

- ①民衆生活のなかから生まれ、民衆によって口から口へ伝えられていった民間説話一般をさすもの。
- ②それは、一人の作者の創作になるものでなく、幾百年にもわたる長い時代を通して数知れぬ多くの人びとの生活のなかから生み出されてきたもの。
- ③民衆が集団としてもっている創造能力が文学的形象化をとげたもの。

というようなものである。

このような民話に対する認識を基に、西郷竹彦著、シリーズ民話と教育3『民話の世界・民話の理論』にそって、講義を進めていった。

その講義の一段落ついた所で、第二回のレポートを試みた。このレポートは自宅レポートの形であるが、保育科A Bクラスは六月二日に題目を出し、六月九日に提出、保育科C Dクラスは五月二十七日に題目を出し、六月三日に提出の形をとった。各々、五・六時間の講義を経過した時点でレポートである。一応、民話についての認識はできた頃のレポートと思う。

このレポートは、自己で一つの昔話を選び、その話の中の、

①話の主人公(主語)の転移の個所を指摘する。

②話の中の擬態語・擬声語の指摘をする。

という、昔話の技法ともいえるようなものをみるレポートである。

この第二回目のレポートは、民話を認識した上で、各自が自由に、自分の好きな話を選ぶであろうことを前提に、ここから短大生の民話についての認識をみたいと思った。(一)民話そのものの認識(二)採話と再話(三)話の構造(四)五大お伽話との関連(五)作家の傾向の五点から、このレポートを分析してみた。順に述べていきたい。

(一)民話の認識

前述したように、民話の概念については提起した時点でのレポートである。表1をみると、その点に疑問をもたれる話も幾点がある。創作文芸、ここでは児童文学は省くとしたにもかかわらず『御伽草子』の再話化と思われる「鉢かつぎ姫」や、「古事記物語」うみをわつたしろうさぎ」等の神話と思われる作品がみられる。しかし、大半においては、再話と採話の問題はあるが、民話の認識をふまえて話を選んでいくように思う。

(二)再話と採話

再話とは、民衆の間に伝承されていた語りを基に作家が創作し、話を再構成して成り立たせたものをさす。いわゆる創作民話である。

採話とは、伝承民話すなわち口から耳へという伝承過程をとり、伝えられてきたものを採集した話である。

この両者を比較すると、再話は全話一・二話型二〇八話のうち九三話型一六九話で、採話一話型一話と、再話の方が圧倒的に多い。

このレポート提起の際、できうる限り採話を選んでほしい旨を出したのだが、その効果はでていないと言える。民話を、採話と認識するよりも、再話とするほうが強い結果であろう。現在、年寄りに昔話・伝説等を直接聞きにいつても、その話を思い出すまでかなりの時間を要する。昔話を語る場合、相手もなくなった故であろう。そのことの反映が、短大生に出たとしても当然の結果ともいえるが、東京や大阪のような大都市周辺と違い、宮崎県の地においてもこのような反映のみが如実にでてくるのは納得できぬところもある。他のレポートの方法も考え、もう一歩つっこんだ分析が必要と思われる。

また、再話と採話ということでは、同話型の話で両者のものが幾点かある。その話を検討してみると、両者のもつ味がわかる。

再話だから問題がある、悪いということとはけつて言えぬが、再話と採話では、かもし出す味わいに違いがある。再話が文字による表現を主眼目としているのに対して、採話は口から耳への伝達、つまり言葉を媒介としたものであるから、一度も昔話を音声として享受したことはない者にとっては、採話のもつ味を一〇〇パーセント理解できるとはいいがたい。(参考資料2参照)

しかし、次の話の構造からみていくと、少しは判然とするであろう。

(三) 話の構造

話の構造とは、昔話の語り始め、語り収め、言わゆる保存部分をさす。話のモチーフについても含んで考えたい。昔話は、一般的に話を語り出す時にいつも決まった文句で始まり、決まった文句で語り収めたものだとする考えがある。つまり常套句の存在である。

再話と採話の両者がみられた話に「雪女」と「法印狐」という話がある。これを検討材料としてみる。

「雪女」は五話みられた。

うち、①『日本むかしむかし(足のないお婆け)』(与田準一・川崎大治・松谷みよ子共編)「雪女」一話・②『おはなし文庫⑥』(ポプラ社発行)の「ゆきおんな」二話・③「ゆきむすめ」(内田莉莎子著)・④『日本昔話集成』(関敬吾編著)の「雪女」一話である。再話四話、採話一話と圧倒的に再話の占める位置の方が大きい。が、四種類の「雪女」もしくは「ゆきむすめ」をみる事ができた。

「法印狐」は二話。①「たぬきと山伏」(『わらしべ長者』木下順二作)と②「多法印と狐」(『夢買長者』佐々木徳夫編)である。前者が再話、後者が採話である。

表2でも、Iでは再話に語り始めが二例、IIでは採話に一例みられる。語り収めは、再話には一例もなく、採話二話には両者ともみられる。

ちなみに、他の採話についても(表3参照)・①は、幼児のために書かれたものであるから、多少の脚色があるかもしれないが、他の

表2 I. 雪女の場合

	語り始め	語り収め
A	むかし	
B	昔	
C	(あるところにおじいさんとお婆あさんがすんでいました。)	
D	(爺さんと婆さんがあった)	とっちばれ

II. 法印狐の場合

A	(あるときあるところを)	
B	むがすむがす あつとごね	こんで、えんつこ もんつこ、さげすた

ものについてみても、なんと、常套句の内容が豊かなものかと思う。参考資料Iをも参照してほしい。

モチーフについて検討してみると、再話よりも採話の方が簡潔である。創作と伝承と、基本的な姿勢の違いから生まれてくるのである。この点については、別考してみたいところである。参考資料2として、「雪女」「法印狐」の両資料を付記しておくので、読みくらべてほしい。

(四) 五大お伽話との関連・教科書について

五大お伽話とは「桃太郎・勝々山・花咲爺・癩取爺・猿蟹合戦」の

表 3

	話 名	話数	語り始め	語り止め	書 名 (著編者名)
A	地 蔵 浄 土	2	昔	善に学ばば徳のもの 悪に学ばば地獄の底 というげな	塩 吹 き 白 (比江島重孝)
B	シュンクタクタ	1	むかし		〃
C	天道さんの金の鎖	1			佐 賀 白 話 (国学院大説話研究会)
D	じえんじえど じえんこ	1	むかしねしの、むかし あて、あたどん	それでとちばれこ	津 軽 白 話 (同 上)
E	化け物寺	1	むがすむがすの ずうっとむがす	こんでえんっこ、もんっこ	夢 買 長 者 (佐々木徳夫)
F	とっくり爺さ	1	とんと昔が あったけど	これでいちごさけた どっぺん	とんと昔があったけど (水沢謙一)
G	鳥のことば	1	むかし		中 部 地 方 昔 話
H	倭 薬 師	1			日 本 昔 話 集 成 (関 敬吾)
I	百足の使い	1			日 本 の 昔 話 (柳田国男)

五話を総括する言い方である。この五大お伽話の、学生の選択に占める位置をみると、

ももたろう(桃太郎) 4

さるかにばなし(かにむかし・さるかに・さるとかに) 6

こぶとり爺さん(こぶとりじいさん・こぶとり) 7

はなさかじい(花さかじいさん・灰まきじいさん・灰まき爺さん) 4

かちかちやま(かちかち山) 2

と二十三話指摘できる。

全体二〇八話の内、ほぼパーセントである。「五大お伽話」そのものについての認識はなくとも、いざ選択をすると、このような結果がでる。ということは、五大お伽話そのものが、民衆の中にかんりの浸透力をもった話の選択であったことの、反証とはなりはしないだろうか。おもしろい結果である。

また、教科書とくに小学校の教科書の中に、民話の導入がみられる。表4を参照してほしい。このレポート提起の際、教科書から選択してもよい旨をこわったが、教科書からは十四話型十八話選択されている。

小学校の教科書には、各学年ごと、必ずといってよい程、民話が教材に導入されている。「民話と子供」というテーマを考える際、一つの実践の場である小学校ということをもまえると、どう取り組むか、教材論の必要があるろう。

(五) 作家の傾向

最後に、作家の傾向についてみると、古典的な児童文学書が取り上

表 4

I. 小学生教科書

		あたらしいこくご (東京童籍株式会社)	○ 旧 版 ● 新 訂 版	小学新国語 (光村図書出版株式会社)
1年	上	○● おむすびころりん		おおきなかぶ
	下	○ いつすんぼうし	● つるのはなし	(たぬきの糸車)
2年	上	○● はやとり	○ (いちごつみ)	
	下	○● ちからたろう	○● きっちよむさん	かきこ地ぞう
3年	上			(モチモチの木)
	下	○ ● 海さちひこと山さちひこ (日本の神話) ○ ヒマラヤのりゅう		力太郎
4年	上	○● (西鶴おもしろ話(5)てんぐのおどろき (2)おにのかたうで)・チワンのにしき		
	下	○● (ごんぎつね)		吉四六の話・(ごんぎつね)
5年	上			
	下	○● (竹取物語)		木龍うるし
6年	上			
	下			(片耳の大シカ)

II. 中学生教科書

		新しい国語 (東京童籍株式会社)	● 新 訂 版 ○ 旧 版	中等新国語 (光村図書出版株式会社)
1年		● 山の背くらべ (木下順二) ○ ウミヒコヤマヒコ (山本有三)		ウミヒコヤマヒコ (山本有三)
2年		○ 安寿と厨子王 (森鷗外)		
3年				

げられているところから、著名な児童文学者も数多くみられる。

坪田譲治三十一例を筆頭に、川崎大治(9)・松谷みよ子(9)・比江島重孝(8)・木下順二(5)・浜田広介(5)という作者である。(表5参照)

この結果からみると、民話イコール児童文学の作品イコール再話とする構図が、大多数の学生の頭に浮かんでくるようである。しかし、第一回のレポートの中で、そのような傾向のもの、本・テレビ・レコード・新聞等からの享受が一七四例と大多数を占める中で、話として聞いたとする三十例も見逃すことはできない。先生から聞いた五例を除いても二十五例を指摘でき、全学生の十パーセント以上が、そのような享受の場に対してしているのである。(表6参照)

(六)

最後に、現在までの享受者に対する昔話研究の試みを検討し、今後の方向性というものを考えてみたい。

昭和四十七年三月、山陰文化研究紀要第十二号「昔話伝承に関する研究(Ⅰ)―母親の意識について―」(中山郁子・稲内恵)と、昭和五十年十一月二十五日、日本民俗学一〇二「昔話享受の位相―山形県西置賜郡下を中心に―」(安部弘子)の二点を指摘することができる。

前者は、島根県松江市内の三小学校の母親および一小学校の四から六年生に対するアンケート調査を基にし、後者は、山形県西置賜郡白鷹町における小学校八校の全六年生・中学校二校の全三年生に対するアンケート調査を基に論述している。

後者では、昔話を、その現地で調査をしたことも含めてであるが、

表5 ● 作者名 —は編者をさす

坪田譲治(31)	川崎大治(9)	松谷みよ子(9)	
比江島重孝(8)	木下順二(5)	上崎美恵子(5)	浜田広介(5)
宮崎県民話研究会(4)	大川悦生(4)	上笹一郎(3)	
岩崎きょう子(3)	きしなみ(3)	徳永寿美子(3)	
西本鶏介(2)	たのしよいち(2)	与田準一(2)	柳田国男(2)
関敬吾(2)	説話研究会(2)	佐野語郎(2)	
奈街三郎(2)	山本和男(2)	佐々木徳夫(2)	

表6 ● 誰から聞いたか(才一回レポートより)

I 本から(122)	新聞(3)										
II テレビ(40)	レコード(1) 紙芝居(6) 劇(2)										
III 話(30)	<table border="1"> <tbody> <tr> <td>祖母7.</td> <td>祖父1.</td> <td>母親12.</td> <td>父親4.</td> <td>姉1.</td> </tr> <tr> <td>先生5.</td> <td colspan="4">(幼稚園、小学校、高校各1 保育園2)</td> </tr> </tbody> </table>	祖母7.	祖父1.	母親12.	父親4.	姉1.	先生5.	(幼稚園、小学校、高校各1 保育園2)			
祖母7.	祖父1.	母親12.	父親4.	姉1.							
先生5.	(幼稚園、小学校、高校各1 保育園2)										

● 著書

採話モノ12(11) 再話モノ169(93) 教科書14(18)
不明13

結果として、小中学校共女子の方がアンケートに対する質もよく、享受の姿勢が積極的であるとす。一般にいわれる女性のほうが伝承者としての気質をもっているということが、実証された結果であろう。

これらの昔話享受の研究をふまえ、かつ、今回の保育科の学生に対するレポート結果を基に、学生の住む現地へと調査に入り、有機的関係をみいだす必要がある。

このような観点から、昔話伝承の生きざまを明らかにしたい。

昔話が、生命を持ち、生き続けるものという前提に立つと、このことをふまえた上での現在を考える必要がある。柳田國男翁が、昔話研究・方言研究と同時に『明治大正世相史』を執筆した眼である。そこには、昔話を考える上で、その昔話が伝承されている現在にも思考がなされているということであり、かつ、その必要性を感じるしだいである。

昔話研究は、過去の遺物を研究する学問ではなく、現在を思考するものであれば、当然その現在をみつめる眼が必要であろう。

そのことを考える一端として、本小論「民話の意識」をまとめてみた。

表1

	● 話の題名	● 採話資料	▲ 教科書	— 五大お伽話
7 (2)	▲かさご地藏(かさじぞう・笠地藏)、こぶとり爺さん(こぶとり・こぶとりじいさん)			ふたりのこぶとりじいさま
6 (2)	かにむかし(さるかに・さるとかに)、おならのしっぽ(とりのみじいさん・鳥呑みじい)			さるかにはなし
5 (5)	こわいこわいふるやのもり(古屋のもり)、●雪女(ゆきおんな・ゆきむすめ) うりひめこ(うり子ひめ、うりこひめ)、ねずみのすもう(ネズミのすもう) ぶんぶくちゃがま(ぶんぶく茶がま)			
4 (5)	ももたろう(桃太郎)、びんぼう神、こぞうとやまうば(山姥と小僧・食べられた山姥) はなさかじい(花さかじいさん・灰まきじいさん・灰まき爺さん)、かもとりごんべえ (権兵衛とカモ)			
3 (6)	▲おむすびころりん(ねずみのもちつき)、▲力太郎(ちからたろう)、ねずみのよめいり からすとたにし、▲たぬきの糸車(ねずみの嫁入り) 豆と炭とわら(豆とわらと炭)			
2 (17)	牛方とやまんば(馬子と山姥)、天のぼり、ちぎれしっぽ、げんごろうの天のぼり 鉢かつぎ姫(はちかつぎ姫)、●鳥のこぼ(きき耳)、鬼の子綱(鬼の子小綱) てんぐのうちわ(てんぐのはうちわ)、●多法印と狐(たぬきと山伏)、大きなかぶ 風ん子太郎、●地藏浄土、竹切爺、いっきうさん(一休さん)(おおきなかぶ) いっすんぼうし(一寸ぼうしとおに)、かちかち山(かちかちやま)、おだんごころころ			
1 (99)	とげぬき地藏様、おおきなかぶ、白い犬と白い糸、地藏さまのいたずら、昇天しそ こなった爺さま、古事記物語、たからてぬぐい、石屋がいちばん、みそ買い橋、井 戸堀り長兵衛、さる地藏、仏の顔も三度、かみなりじいさまといなづまばさま、百姓 じいさんとてんぐ、茶店のいたずら者、てんぐのかくれみの、いもぎしの作法、 とぎが原のぎつね、ふなひき太良、こじきのくれた手ぬぐい、きつねによぼう、 黄金の沼、ばかむこさん、だいじゃとこぼん、てんぐのこま、きつねのよめいり、 みそ豆なら、天までとどいた竹の話、ちゅうじょうひめ、米つぶよめさま、地獄の あばれ者、カメとイノシシ、ばけくらべ、食うか食われるか、たにしのおむこさん、 与市と与成、小判の虫ぼし、養老の滝、熊野の権現様、じえんじえどじえんこ、水 げんか、おこらないもくべえさん、すずめのひょうたん、しったかぶり、おいてけ 堀、百足の使い、とらときつね、とつくり爺さ、●俵薬師、●化け物寺、かじかびょう ぶ、ワラビの恩、子じかのびんちゃん、サルとキジ、きつねがだまされた話、旧正 月の大福もち、にわか坊主、海へ行きたがっていたねこ、ほらふき太郎、わらしべ 長者、かっぱのねんぐ、空へきえた長者どん、ななつのほし、キジも鳴かずば、ぴ っぷとちょうちょう、とつづくびく、夜泣きのあかり、木曾の大力権兵衛、フク ロウの染物屋、六尺どん、うみをわたったしろうさぎ、蛙の女房、まいたけ、耳か けソーメン投げまんじゅう、打出の小追、へひりのよめさん、▲うぐいすの宿、やま どりの矢、あっちかなこっちな、シユンクタクタ、●天道さん金の鎖、もぐらとが まがえる、あるくつの話、野原のつくみ、クラゲ骨なし、きつねのお産、タヌキの 坊さん、らしょうものおに、てんぐの花、かべのツル、てんぐとかっぱとかみなり どん、きんたろう、てぶくろ、田野久と大蛇、▲モチモチの木、さるとかにのもちつ き、さるとひきの旅、まっ黒な絵馬、蚊すもう。			

参考資料1

<p>● 語り始め・語り収めについて</p> <p>語り始め・語り収めあり (37)</p> <p>語り始めのみ (132)</p> <p>語り収めのみ (6)</p> <p>なし (33)</p>
<p>● 語り始め</p>
<p>I. 昔系 (13)</p> <p>むかし(50) 昔(8)</p> <p>とんとむかし(7) とんとんむかし(3) とんと昔があったげど(1)</p> <p>あんなあ、むかしなあー(1)</p> <p>ずうっとむかし(1) ずんとむかしの話です(1)</p> <p>むかしあったんだと(1) むかしあったと(1) むかしあったというのがのう(1)</p> <p>なんとなんと昔があったそうなわい(1)</p> <p>むかしのことです(1)</p>
<p>II. 昔々系 (21)</p> <p>むかしむかし(76) 昔々(3) むかーしむかーし(2) えーむかしむかし(1)</p> <p>むかしむかしナ(1) むがすむがすあつとごね(1) むかしむかしのこと(1)</p> <p>むかしむかしあったけど(1) むかしむかしのことじゃが(1) むかしむかしです(1)</p> <p>むかしむかしのことです(1) むがしねしの、むがしあてあたどん(1) むかしむかしあったとき(1)</p> <p>あぬやな、むかしむかしのはなしやが(1) さあむかしむかしのお話じゃ(1)</p> <p>これはむかしむかしのあわれな話じゃ(1) 昔々のお話しです(2)</p> <p>むかしむかしのおはなしです(2) むかしむかしのお話しです(1)</p> <p>むかしむかしの話である(1) むかしむかしのお話さ(1)</p>
<p>III. その他 (5)</p> <p>むかしむかし、そのむかし(1) むかしむかし大むかし(1) むかしむかし大むかしのことです(1)</p> <p>むがすむがすのずうっとむがす(1) むかしむかし、そのまたむかし、わしらのじっさまや、</p> <p>ばっさまのいやいやそのまたじっさまやばっさまが、まだうまれてもおらなかつた、ずうっと</p> <p>むかしのことでござった(1)</p>
<p>● 語り収め</p>
<p>I. めでたし系 (5)</p> <p>めでたしめでたし(16) メデタシメデタシ(2)</p> <p>これでめでたしめでたし(1) それではめでたしめでたし(1)</p> <p>それではめでたしめでたしめでたし(1)</p>
<p>II. おしまい系 (7)</p> <p>おしまい(6) これでおしまい(3) これでおしまいちゃん、ちやん(1)</p> <p>それでなあ、この話もおしまいさ(1) おかしな話ですそれではさようなら(1)</p> <p>これでおしまい、とっぴんばらりのぶうー(1)</p> <p>これでおしまい、人まねするものではないというおはなし(1)</p>
<p>III. その他 (11)</p> <p>それとちばれこ(1) とっちばれ(1)</p> <p>これでいっちごさげだどっぺん(1)</p> <p>これでいっちごさっけどっぺん、ぐらりんなべの下ガラガラ(1)</p> <p>これでえんっこもんっこさげだ(2) と申すカッチリ(1)</p> <p>チョンしまい(1) どんどはらい(2) 大むかしの話です(1)</p> <p>トンピカンコナイケド(1)</p> <p>昔こっばりごんぼの葉あえて食ったらうまかつた(1)</p>

参考資料 2

『津軽むがしこ集』川合勇太郎・編著

(採話)

(関敬吾『日本昔話集成』六六九雪女所収)

一六、泡になつて解けた雪女ゴ

ヂさと婆さがあつた。二人には子供がなかつた。ある吹雪の晩の事であつた。ひどい吹雪に交つて子供の泣く声がかきこえたので、ヂさまは外の戸を開けて見た。

するとそこには、白い着物をすつぽらと着た美しい雪女ゴが立っていた。手には子供を抱いて、しよんぽらと立っていた。ヂさは、

「お前さま、どしたでしば、寒がべし、さ入りしなが」といった。

「有難ごいし、どうがこの子供だけちよつと抱いでけんが」と雪女ゴが言った。

ヂさは子供を受け取つて抱いてやつた。その時強い吹雪がして、雪女ゴは粉々にくだけてとんでしまった。ヂさはどつてんした。そしてその子供を抱いて急いで家へ入つた。

色の白い美しい女の子であつた。

ヂさと婆さは子供を大切に育てた、子供は大きくなった、けれどもこの子はお湯が大嫌いであつた。いくら何ですゝめても子供は湯に入らなかつた。

ある時ヂさは風呂をたいて、無理々々に入れた。いつも美しい娘だからお湯に入れて磨いたらもつともつと綺麗になるに違ひないと思つた。しかし風呂へ入れた子供は、長い間待たせても出て来なかつた。湯の音一つしないので、ヂさはおかしいと思つて

「どしたんだば、あまり入つていれば、湯まぐれしベエ」と戸の外で叫んだが、何の答もなかつた。ヂさも婆さも心配になつて、風呂場を見ると娘の姿はみえない。

「あねー、あねー、」

と二人は叫んだが娘はそこに居なかつた。二人は泣く／＼湯の中をのぞくと、娘はもう解けてしまつて、白いあぶになつて湯の上に浮んでいた。とつちばれ。

「ゆきむすめ」

内田莉莎子 (再話)

あるところに、おじいさんとおばあさんがすんでいました。だんだん、としをとつていくのにふたりにはこどもがいませんでした。おじいさんとおばあさんは、それはたいそうさびしくおもっていました。あるふゆのことでした。こどもたちがげんきいっぱいゆきあそびをしていました。ゆきだるまをつくるこどももいました。まどから、こどもたちをながめていたおじいさんとおばあさんは、そとにいきたくなりました。

「おばあさんや、わしらもそとにでてみよう」

「ええ、おじいさん。ゆきでおんなのこをつくりましょう。」

ゆきむすめをね」

おじいさんとおばあさんは、にわにでて、ゆきむすめをつくりはじめました。

てをつくり、あしをつくり、かおをつくりました。きらきらひかるこおりのかけらがめになりました。

かわいらしいおんなのこができました。おじいさんとおばあさんは、

うっとりみとれました。すると、とつぜん、ゆきむすめはにっこりわらって、てをあげるとひとあし、ふたあし、ゆきのなかをこやのほうへあるきだしました。おじいさんとおばあさんは、おどろくやら、よろこぶやら。あわてて、あとをおいかけました。

ゆきむすめはみるうちにおおきくなりました。ひましにかしこくうつくしくなっていました。おじいさんとおばあさんはゆきむすめをめにいれてもいたくないほどかわいかりました。あかいかわのながぐつや、しゆすのりぼんもかつてやりました。いつのまにかふゆはすぎで、はるがきました。おひさまにあたためられて、ゆきがとけはじめました。こおっていたおがわも、おとをたててはしりだしました。こどもたちはたのしそうちに、そとを駆けまわりました。

けれども、ゆきむすめは、じつと、うちのなかにとじこもって、あそびにいらこうとしませんでした。

「むすめや。どこか、わるいのかい？それともかなしいことでもあるのかい？」

おばあさんがしんばいしてたずねても、ゆきむすめは、だまって、くびをふるばかりでした。そらをくろいくもがはしってさむくなるときだけ、ゆきむすめはうれしそうでした。やがてなつがきました。おんなのこたちがつれだつて、ゆきむすめをさそいにきました。

「もりへあそびにいきましょう！」
「あついわ。おひさまがこわいわ」

ゆきむすめはいやがりました。けれども、おじいさんやおばあさんにすすめられて、しかたなくつんだり、はなわをあんだりしました。でも、ゆきむすめだけはこかげにすわって、おがわのみずであしをひや

しながら、おひさまがしずむのをまちました。やっとおひさまがしずみました。よるがきました。

おんなのこたちは、かれえだをあつめてたきびをはじめました。そして、たきびのとびこえごっこをおもいつきました。はじめのひとりごとびこえました。ふたりめも、さんにんめも、よにんめもとびました。とうとう、ゆきむすめのばんになりました。

「どうして、とばないの？とぶのが、こわいの？」

みんなは、ゆきむすめをわらいました。

ゆきむすめはおもいきつて、ひのうえをとびました。ゆきむすめはどこにいったのでしょうか。どこにもすがたがみえません。たきびのうえに、しろいゆげがたちのぼっているばかりでした。ゆげはほそいくもになって、ほかのくもおいかけながら、うえへうえへのぼっていききました。

『夢買ひ長者―宮城の昔話―』

佐々木徳夫・編 (採話)

多法印と狐

むがす、むがす、あつとごぬ、たほうえんつつ (多法印という) ほんえんさん (法印様) が、えだんだど。

あつとご、まつつア (町へ) よたす (用達し) さえつたんだど。ほすたつつけ、ままコ (土手) で、チズネ (狐) が、しるね (昼寝) すてだんで、しどず、たまげがすてやつペエ (たまげさせてやろう) と思って、チズネの耳さホラゲエ (法螺貝) 当で、

「ボーッ」

と吹えだんだど。チズネは、たんまげで、つるこけえすて（反射的に飛び上がるようにして）、ねげでつたんだど。多法印が、

「アツ、ハツ、ハア。アツ、ハツ、ハア」

ど大われえすながら、ええでだつつけエ（歩いていたら）、ぬわがぬ（俄に）、しが暮れで、真つ暗くなつてすまつたんだど。まだ、しる過ぎなのぬ、おがすねエ（おかしい）ごどもあるもんだど思つてだつつけエ、もごう（向こう）の方がら、

「ジャジャーン、カーン、チーン」

ど鳴り物鳴らすて、おそうすじ（お葬式）が、やつてちたんだど。多法印は、うすちみわりぐ（薄気味悪く）なつてスギヌジ（杉の木）さ、ワラワラど登つたんだど。おそうすじは、だんだん、だんだん、つか寄つてちて、スギヌジのすたさ、ガンバゴ（棺箱）かんおけ）埋めですまつたんだど。ほすて、みんなサーツと、しじあげだ（引き上げた）ど思つたつけエ、ガンバゴ埋めだ穴がら、青火が、ポツポツと出でちたんだど。ほすて、

「たーほーえーん。たーほーえーん」

ど、ゆえながら、細え手が伸びでちたんだど。多法印は、おつかねエぐなつて、ボンガリ飛び下りだつつけエ、そこア、ためえげ（溜め池）だつたんだど。ほすたつけエ、チズネが、

「さつちだ（さつき）の返報だぞーツ。ギャーン、ギャーン」

ど鳴じながら、山の方さねげでつたんだど。こんで、えんつこ、もんつこ、さげすた。

『日本民話選』（岩波少年文庫一七九）

木下順二・作（再話）

あるときあるところを、こわい顔をした大男の山伏が、ほら貝を背中にせおうて、一本歯の高げたをはいて、えらそうに肩をゆさぶりながら歩いておつた。

まだ時刻はひるをちよつと過ぎたばかりで、おてんとうさまは、かんかん高いところで照つておつた。

すると道ばたの木の根に、一びきの大きなたぬきが、きもちよさそうに昼寝をしておつた。それをみつけた山伏は、いっちょおどろかしてやろうばいと思つて、一本歯の高げたのまんま、ぬき足さし足、たぬきのそばに近よると、その耳のわきへほら貝をもつていつて、とてつもない大きな音で、**ボワボワボワ**とばかり、吹きならした。

たぬきはびつくりぎょうてんして、一間ばかりもとびあがつて、いっさん走りにかけだしたが、だいぶ行つてからちよつと立ちどまつて、

「おう、見ちよれ」

というような顔で、ちよろつとこつちを見て、それから、ふりむきふりむき、にげて行つた。

山伏は、そのうしろすがたがおかしくておかしくてたまらんのので、天までとどきそうな大きな声をだして、笑つても笑つても、なかなか笑いがとまらんほどであつた。

それから山伏は、そのあたりを二、三軒まわつて、こんどはつぎの村へ行こうと思つて、一本歯の高げたの音をガランガランとひびかせながら、えらそうに肩をゆさぶつて、ゆつくりと歩いて行つた。

ところが、その日にかぎつておそろしく時のたつのが早くて、それ

につきの村までの道のりがおそろしく遠くて、まだあんまり行かんうちに日がどんどんとくれてきて、いつのまにかとつぷりとくれてしもうた。

山伏は、

「きようはまた、どういう日のくるるとの、早かもんじやろかい」と、ひとりごとをいいながら、足を早めて、歩いていった。

しばらくすると、まっくらな中を、むこうのほうから白いきものをきた人たちの行列が近づいてきた。それは、よく見るとそうしきの行列であった。山伏は、

「わあ、あらアそうしきばい。こら、きみのわるか。今じぶん、こまったもの来たね」

と思うたけれども、一本道であるからして、ほかのほうへにげることができん。しかたがないので、まわれ右をして、いま歩いてきたほうへ、ひつかえしはじめた。

ところが、そのそうしきの行列は、おそろしく足が早うて、すぐうしろに追いついてきそうになりよつた。山伏はこわいもんだから、へいこうして、一本歯の高げたをはいたまんま、だんだん大またに歩きだして、だんだん足を早うごかしだして、しまいにとうとうかけだしたが、白いきものの行列は、やつぱりびつたりとうしろにくつついてきよる。それでもう、いっしよけんめい、いきが切れそうに走って行くと、さいわい大きな松の木が一本、道のまんなかに立つておつたので、やつとそこへかけつけて、大あわてで一の枝までよじのぼつてもうた。

そうして、白いきものの行列が通りすぎたらおりようと思つて見お

ろしておつたら、びっくりしたことには、白いきものの行列は、その松の木の下のとまりよつた。そうしておいて、木の根のところにおかみをおろして、坊さんたちが、ボジャボジャボジャとお経をよみはじめた。

「あらあら、こらアこまったことになつたばい」

と思つて、山伏が木の上からながめておると、やがてお経がすんで、こんどは木の根のところをみんなが掘りはじめた。そうしておいて、その穴のなかへおかんをうめて、それからやがて、ひとりかえり、ふたりかえりして、そのうちにだれもそこにはおらんようになってしもうた。

山伏は、だれも人がおらんようになったので、さて自分もかえりたもんだと思つたが、木の根のところにおかんがうめてあると思つた、どうもこわくておりに行けん。そうかというて、木の上で夜あかしをするわけにもゆかず、どうしようかと、まっくらな中で、松の木の枝にまたがり、ほら貝をせおうたまま、山伏は考えこんでおつた。

そのうちに、あたりは、ますますしんしんと、しずかになつてきた。そのうちに、山伏が、なんの気もなく、ひよつと木の根のほうを見おろすと、今おかんをうめたばかりのところから、白いきものをきたもんが、ふらりふらりとはい出してきよつて、山伏のおるほうへむかつて、そりそりと木をはいのぼつてきよるようだった。

山伏は、枝の上からそれを見ておつて、

「わあ、こらアこまったぞ。こらアどげんことになるどじやろかい」と思つて、それを見ておつた。すると白いきものをきたもんは、だんだんそりそりとはいのぼつてきて、山伏がまたがつておる一の枝

の下まできて、山伏の足に、白いきものをきたもんの手がさわりそうになつたので、

「あら、わあい」

とわめいて、山伏は上の枝へのぼつた。すると白いきものをきたもんは、またそりそりと、その枝の下まで、はいのぼつてきて手をさし出した。それで山伏はまた上の枝へのぼつて、また上の枝へのぼつて、しまいにとうとう山伏は、その松の木のてっぺんまでのぼつてしもうたが、それでもやっぱり白いきものをきたもんは、そりそりとはいのぼつてきて、手をさしだして、山伏の足にさわろうとしよる。それで山伏は、どうにもこうにも、しようがなくなつて、思わず背中にせおうておつたほら貝をひつつかんで、いきのかぎりに、ポワポワポワンと、気が遠くなるほど吹きたてて吹き鳴らしていつまでも鳴らかしておつた。

そのうちに、あんまり人声があるので、山伏が気がついてみると、そのあたりではたけしごとをしておつた百姓たちが、その松の木の根もとにあつまつて、わいわいさわいでこつちを見あげておつた。

いつもはこわい顔をしていばつておる山伏が、ひるのまっぴるまに、高い木のてっぺんにのぼつて、死にものぐるいでほら貝を吹きたてておるのを、みんなでおもしろがつて見物しておるのであつたそう。